

令和元年6月7日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26360053

研究課題名(和文)セブンスistersの歴史と女性のリーダーシップ教育

研究課題名(英文)History of the Seven Sisters Colleges and Women's Leadership Education

研究代表者

高橋 裕子 (Takahashi, Yuko)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：70226900

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：セブンスistersの歴史を踏まえ、とりわけ女子大学として躍進している5つの女子大学(バーナード、プリンマー、マウントホリヨーク、スミス、ウェルズリー)が展開している女性のリーダーシップ教育の今日的動向を調査した。特に、女性というカテゴリーを一枚岩で捉えきれなくなっている現在、トランスジェンダー学生の受け入れをめぐるアドミッションポリシーをどのようにアップデートしながら女子大学の存在意義を確認しアピールしようとしているのかを分析。2014年から15年にかけてこれらの5女子大学が公表した新たなアドミッションポリシーの検討を通して、21世紀の女子大学におけるリーダーシップ教育の重要性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

女子大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れは日本においても喫緊の課題となっている。その意味で、本研究は米国の女子大学が2010年代の前半に経験した事象を参照するという意味において学術的にも社会的にも意義があった。性別の捉え方が変化している21世紀において、女子大学の存在意義は女性の社会参画の状況といっそう密接に関連している。女子学生に必要とされるリーダーシップ教育や女性をエンパワーする特色ある大学文化、さらには女子大学のコアバリューズを再考する意味でも本研究は有意義であった。日米ばかりでなく、カナダ、韓国、アイルランド、イギリスでの学会発表は学術交流の上できわめて貴重な機会であった。

研究成果の概要(英文)：My research project covered the recent controversies of admission policy changes for accepting transgender students at the leading women's colleges in the U.S. In particular, I analyzed the new admission policies of five women's colleges (Barnard, Bryn Mawr, Mount Holyoke, Smith, and Wellesley) of the Seven Sisters Colleges in the U.S. The new policies were released between 2014-15. We can see gender binary is questioned not only in theory but also in practice under the settings of higher education, particularly in women's colleges in the U.S. At the same time, however, the needs and significances of leadership education at women's colleges are reconfirmed and emphasized through these controversies and discussions for women to advance in diverse fields. Women's experiences at the center of higher education are still valued and appreciated for empowering women to be confident and become leaders.

研究分野：アメリカ社会史(女性・家族・教育)、ジェンダー論

キーワード：セブンスisters 女子大学 リーダーシップ トランスジェンダー 高等教育 女性史 LGBT 性的マイノリティ

1. 研究開始当初の背景

2011年12月6日、米国国務省は米国ばかりでなく世界の次世代の女性リーダーを育成し、政治的な分野を含む公職への女性の参画を促すべく、バーナード大学、プリンマー大学、マウントホリオーク大学、スミス大学、ウェルズレー大学のセブンシスターズの大学と連携して展開する、「The Women in Public Service Project」(WPSP)を発表した。国務省は、これら5女子大学と連携し、公共サービスに貢献し、政治分野も含め、公職で指導的な立場に立ち活躍する次世代の女性を育成すべく、女性の支援とメンタリングのインフラ整備を実施する。目標は、2050年までに公職に占める女性の割合を50パーセントにすると数値目標も明らかにした。

このような動向に関心があり、2013年8月末から2014年3月末までフルブライト Visiting Scholar としてウェルズレー大学に所属し、セブンシスターズの歴史と現状について、アドミニストレーター、ファカルティ、学生等へのインタビューと共にアーカイブでの調査を実施した。スミス大学での新学長の就任イベントにも参加したが、とりわけリーダーシップ教育を中心に女子大学の未来が語られていることを学んでいた。

7ヶ月間の滞在期間で5大学すべての現代史—特に、女子大学であることを選択する意思決定のプロセス—を十分に精査することは不可能であり、更に科学研究費を得て本研究の息の長い継続が必須であると認識するに至った。

2. 研究の目的

過去1世紀にわたり、米国の高等教育における女性の状況は著しく変化した。かつて女性に門戸を閉ざしていた伝統あるアイビーリーグの大学等がその扉を開き、共学化の圧倒的な動きの中、セブンシスターズのうち2大学は共学の機関となる道を選んだ。しかし、バーナード大学、プリンマー大学、マウントホリオーク大学、スミス大学、ウェルズレー大学は「女子大学」を維持する選択をした。

本研究では、21世紀においても女子大学であることを選び取ったこれら5女子大学を研究対象とし、5女子大学の現代史を精査するとともに、今日の大学という場における、21世紀的ビジョンの形成とリーダーシップ教育を中心とした新たな教育事情に注視し、女子学生や卒業生、また世界の女性も含めてどのような方法でエンパワーしようとしているのかを調査することを目的とした。

3. 研究の方法

セブンシスターズの5女子大学のアーカイブ調査及びアドミニストレーター、ファカルティ、学生、同窓会関係者のインタビュー調査を実施した。5女子大学で実施されるWPSP サマーインスティチュートにも参与型調査を行い、リーダーシップ育成の方法を習得するとともに、リベラルアーツ教育に根差し、人文科学系の学術的な理論的枠組みで捉える、女性を主軸にすえたリーダーシップについて有意な文献を網羅し検討を重ねた。

2013年度後期の海外研修期間中に、フルブライト Visiting Scholar としてウェルズレー大学で培ったネットワークを4年計画である本研究課題の礎とし、新たなトランスジェンダー学生の受け入れについてもウェブで公開されたアドミッションポリシーやアーカイブを訪問し得られた資料を用いて考察した。

4. 研究成果

2014年度以降セブンシスターズの女子大学において、トランスジェンダー学生の受け入れをめぐる、アドミッションポリシーを変更するような注目すべき大きな動きがあった。他方で、そのことを通して女子大学であることの意義がいっそう明確化されたとも言える。このような動向を精査しつつ、5女子大学(バーナード大学、プリンマー大学、マウントホリオーク大学、スミス大学、ウェルズレー大学)の方針について、歴史的な経緯も踏まえつつそれらの共通点と差異を明らかにした。2014年以降の5女子大学の文書化されたアドミッションポリシーを確認して分かることを整理すると以下の通りである。

第一に、5女子大学とも創設時からの歴史的に重要な女子大学としてのミッションと特色を重視し、女子大学であるという高等教育機関としてのアイデンティティを堅持する方針を、検討のための特別な会議体を設けて、専門家を含む学生、教職員、卒業生の相当数の意見を聴取し、審議を重ねた上で、再確認していることである。

第二に、5女子大学とも女性に特化した言語(gendered language)の使用を継続していくことを宣言していることだ。学内に男性というアイデンティティを持つ学生がいたとしても、大学のアイデンティティとして女子大学であり、シスターフッド、卒業生(alumnae)等といった、女性形の名詞や人称代名詞を使用し続けることを確認している。これは女性が大学でセンターに据えられていることと関係が深い。共学大学と類似したキャンパス文化になってしまえば、女子大学としてのミッションが果たせないという判断が背景にある。

第三には、応募の時点において、性別については自己申告制であり、学生自身の性自認を重

視していることである。政府機関が発行する身分証明書や出生届け等の文書によって性別を決定しないという方針に5大学とも一致した。ある意味、それほどジェンダーアイデンティティが流動的なもの (gender fluid) として広く捉えられていることを示唆している。

第四には、いったん入学した学生に対しては、性別が男性に変更された場合でも、学生のニーズに対応できるよう支援していくという方針を明示していることだ。具体的には、卒業要件を満たせば学位は授与するし、また、転学を希望する場合にも必要なガイダンス等を提供していく姿勢を明示した。

5つの機関の中で、一つの大きな相違点として確認できることは、マウントホリヨーク大学だけが応募時に、男性というアイデンティティを持っていても出生時に女子であれば、応募資格ありと判断をしていることだ。入学時においてトランス男性を包摂するかしないかで、マウントホリヨーク大学のみ応募資格を認め、あとの4女子大学は応募資格なしとすると、この点での線引きについての判断がはっきりと分かれた。

学会や研究会に所属する研究者ばかりでなく、同様の課題に取り組んでいる日本の女子大学の関係者にも本研究の成果を広く紹介発信できた意義は大きかったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

高橋裕子、トランスジェンダーの学生をめぐる入学許可論争とアドミッションポリシー-21世紀のアメリカにおけるセブンシスターズ的女子大学を中心に-、ジェンダー史学、査読無、12号、2016、5-18

〔学会発表〕(計 8 件)

高橋裕子、社会と教育における LGBT の権利保障について、2018 年度社会デザイン学会公開講演会、2018

Yuko Takahashi, Umeko Tsuda 's Spirit: Teaching the Founder 's Educational Philosophy at Tsuda University, International Federation for Research in Women 's History 2018 Conference, 2018

Yuko Takahashi, Transgender Students and New Admission Policies of the Leading Women 's Colleges in the 21st Century America and Japan, The 53rd International Conference, 2018

Yuko Takahashi, Transgender Students and Updated Admission Policies of the Historically Significant Women 's Colleges in the 21th Century America and Japan, History of Education Society Annual Conference 2018, 2018

Deniz Cizmeciyan, Yuko Takahashi, Yuko Itatsu, and Diane C Rodriguez-Kiino, STEM Education in Japan: Examining the Professionalization Pipeline for Females, The 17th Berkshire Conference on the History of Women, Genders, and Sexualities, 2017

Yuko Takahashi, Women 's Higher Education in Meiji Japan: Umeko Tsuda and Her Transnational Networks for Founding Tsuda College - Celebration, Commemoration and Collaboration, History of Education Society 50th Anniversary Conference, 2017

高橋裕子、アメリカの女子大学における入学許可論争 - セブンシスターズを中心に -、第12回ジェンダー史学会年次大会シンポジウム、2015

Yuko Takahashi, Body, Gender, and The Embodiment of Education at Women's Colleges in 21st-Century America, アメリカ学会、2014

〔図書〕(計 3 件)

高橋裕子 他、丸善出版、アメリカ文化事典、2018、410-411、452-453

高橋裕子 他、青弓社、教育とLGBTIをつなぐ、2017、247-273

高橋裕子 他、学文社、LGBTと女子大学、2018、42-54

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。